

第6回

「ポジティブに受け入れ、進化する」

東北大学大学院 教授 高橋 信



経済産業省の審議会で委員として活躍されている先生にインタビューをお願いしたところ、ご多忙中にも関わらず「お役にたてれば」と快諾してくださいました。原子力分野、ヒューマンインターフェース、リスクコミュニケーションと広い分野でパワフルに活躍していらっしゃる先生にお話を伺いました。

ー小さい頃はどんな子どもだったのですか。

昭和39年(1964年)に山形で生まれました。実は、私が3歳の時に父が亡くなつたのですが、祖父母がおりましたので何不自由なく育ちました。最近、父の過去のことが知りたくなり、帰省したときに母に尋ねたところ、父が撮影したセピア色の写真が沢山出てきました。その中に山形県内の水力発電所のダムの写真が

数多くあり、電力会社に勤めていた父はダムの管理の仕事にも携わっていたようでした。私は小さい頃から明るい子どもでした。ラジオを作ったり電気工作をしたりと理系のものに関心がありました。実はダムが好きで小学校3年生のときに母に頼んで黒部ダムに連れて行ってもらつたことがあります。その頃は父の仕事をことを知らなかった訳ですから、ダム好きなところは父からの遺伝子かもしれません。最近、フェイスブックに父の写真を掲載したところ、「父に似ている」と反響があり、父との関係が発掘でき嬉しかったです。

母からは「物好きなところが父に似ている」と言われています。父は写真を沢山撮る人だったらしく、自分で作った真空管のラジオの写真も出てきました。私がラジオを作ることが好きだったので父からの遺伝子かもしれません。実は3歳上の兄も工学系の研究者になっていますので、理系のものに関心があることはやはり父からの遺伝子を兄弟で受け継いだのではないかと思います。

ー研究者になったきっかけは何ですか。

結果から言えば全く偶然です。初めから研究者を目指していた訳ではありません。昭和61年(1986年)に東北大学工学部原子核工学科を卒業し大学院に進学し、北村正晴先生の研究室で、最初は炉雑音解析の研究をしていました。原子炉のプロセスパラメータデータを精密に測定して、細かいデータのゆらぎから異常を検出する研究です。大学院修士課程を卒業したときに少し就職活動をしましたがピンとくるところがなく、北村先生の勧めもあり博士課程に進学しました。その時は、とりあえずという感じだったのですが、米国原子力学会(ANS)等に参加させて頂くうちに、

少しずつ研究が面白くなってきました。そのまま三年で博士号を取得しましたが、博士課程を修了したときには大学に研究者としてのポストがなくて、ポスドクという形でそのまま研究室に在席していました。そんな折に結婚しましたから、厳密には学生結婚ということになります。いつまでも嫁さんに養ってもらうわけにはいかないので、多少分野が違っても助手のポストがあったので、そこに行くのもしかたないかと思っていました。吉川榮和教授から「うちの助手にならないか」と声をかけて頂き、次の年に京都大学の原子エネルギー研究所の助手に採用されました。ヒューマンファクターの分野では著名な東北大学の北村正晴先生と京都大学の吉川榮和先生に師事できたことは私にとって大変幸運なことであったと今更ながら思います。宇治キャンパスの原子エネルギー研究所には1992年から1996年までいましたが、二人の子供はそこで生まれました。故郷から離れて嫁さんと二人で大変な時期でしたが、今となっては良い思い出です。その後、東北大学に戻りましたが、その時期に知り合った方々とのご縁は今でも続いており、私の研究の基礎ができた時代です。

—沢山の学会で活躍されていますね。

主に活動している学会は、日本原子力学会、ヒューマンインターフェース学会、計測自動制御学会、人間工学会などです。炉雑音データに基づく異常診断が私の研究の原点ですが、研究を進めるうちに原子力プラントの安全性を高める上で重要なのは結局は人間の問題であると考えるようになり、研究の軸足をヒューマンファクターにシフトさせていきました。ヒューマンファクターが重要な分野としては航空分野があり、ちらの方にも研究のスコープを広げていきました。

大学の講座としては、二つの講座を兼任しており、一つは量子エネルギー工学専攻の核エネルギーシステム安全工学分野、原子核システム安全工学講座で、学部教育にも関与して学部からの学生が進学してきます。もう一つの講座は、技術社会システム専攻のリスク評価管理学分野です。さらに、東日本大震災後に多賀城市に設置された、制御システムのサイバーセキュリティの研究を行う制御システムセキュリティセンター(CSSC)の本部長も務めています。

—リスクコミュニケーション分野を始めたきっかけは。

いわゆる東電問題をきっかけに、原子力の社会的受容に関する関心が高まって来た頃、北村先生が技術社会システム専攻の博士課程に入学してきた八木絵香さん(現大阪大学コミュニケーションデザインセンター准教授)と一緒に六ヶ所村と女川町をフィールドとして対話活動を始められ、私もご一緒させて頂きました。このような社会的な研究活動は私にとって初めてでしたが、大変有益な経験をさせて頂きました。特に、この時から始まった六ヶ所村と東北大学の連携は今でも続いており、大変良い関係を継続しております。

その時の経験から地元の方々が何を懸念しているか、その思いに耳を傾ける「聴く力」が大切であることを痛感しました。そして伝えるためには専門家としての相場観を、分かりやすい言葉で語ることが重要であるということを学びました。

—迷える若い人にひとことをお願いします。

大学の学生には、「変化の激しい社会なのだから将来は不確実であることを十分に認識し、変化を敏感に察知する能力が大事だ」と言っています。現在は、大企業であっても倒産するような不確実性が大きな世の中ですので、あまり自分の思いに固執するのではなく、この時代が何を要求しているのかを感度良く見極め、現状に適応しポジティブに受け入れていくのが良いのではないかと思います。もし、やるかやらないか迷うことがあるなら、私は絶対にやる方を選びます。結果論ですがそうすることで私はここまで来ることができたと思います。

—先生のパワーの源は何でしょうか。

40歳代から始めた自転車でしょうか。いまではあまり運動をしていなかったので体力に自信はありませんでした。今は、自転車で通勤することもあり、週末はトレーニングをして、年に数回レースにも参加しています。ロードバイクで山登りをするヒルクライムレースです。乗鞍、蔵王、鳥海山、富士山などのレースに参加しました。今年で50歳になりましたが、今が私の人生で一番体力があり一番充実しています。

自転車のほかには、廃線や廃道めぐりも好きです。

テレビの番組に刺激されて、東京の地形にも興味があります。東京に来るとそういった視点で街を観察しながら歩くのが最近では楽しいですね。いろいろなことに関心を持つことがパワーの源かもしれません。

(編集後記)

パワフルに多方面で活躍されている高橋先生は、今が一番充実しているとのことでした。「ここまで研究者として進んで来られたのは、運です。」とご謙遜されていましたが、先生のパワフルで明るい性格は人を引き付ける力があるのではないかと思いました。

また、ご専門分野が多方面に広がっていることは、先生が社会の要請を積極的に受け入れ、いろいろなことに関心を持ち、明晰な頭脳で次々に解決しているからではないかと感じました。益々のご活躍を信じております。

2015年1月